

向井潤吉

旅路 作家の足跡を求めて

12月3日土 — 2006年3月26日日

旅先でのささやかな出会い。

そこで絵筆を構える理由。



《北条町の表通り》(茨城県つくば市北条) 昭和41年(1966)



《微雨》(長野県木曾郡南木曾町妻籠) 昭和49年(1974)

向井潤吉は、旅の途次や制作地での思いを綴った文章を数多く残しています。それらの一つひとつには、実際に現地を訪れた者でなければ、感じ得ない情感があふれています。

また、そうした旅の記録は、写真やスケッチのように、のちの制作の良き糧になったに違いありません。向井潤吉にとって、旅をすることと作品を制作することは、決して切り離せない制作の過程であり、かたちであったのでしょうか。

「終戦後、民家を描く目的のために、どれほど国鉄を利用しただろうか、と求めて、地図を調べてみたら、幹線はすべて乗ったし、支線もわずか四つか五つを残す程度に乗り回したことが分かった。…」(昭和37年9月27日朝日新聞)

向井は全ての駅に下車したわけでもないし、必ずしも気に入る場所に行き当たる機会に恵まれるものでもなかったと続けていますが、向井潤吉の旅が、いかに広範囲にわたっているかを物語る彼自身の言葉です。

向井潤吉は全国を巡りながら、多くの情景や人々に出会っています。そうして、その土地に流れる独特な生活の空気を、咀嚼して、そこに制作のヒントを得て、作品の構想を築きあげていったのではないのでしょうか。

「…(京都の)御室、鳴滝を抜けて愛宕道にさしかかると、今でも表戸を閉ざしたまま、縁台にわずかな野菜を並べて売っていたり、柱にワラジをつってある家がある。もう愛宕まいりにワラジを求める人もあるまいと思うが、やはり昔からの習慣なのであろう。先日その奥の鳥居本へスケッチに行ったが、十年ぶりで再び見た家は、壁の破れも竹藪のおき方も以前のままであった。私の仕事を後に立って見ていた老人が、

『こんな狭い谷底みたいな土地では、エライ人も金持も出まへんわ』

と、ボヤいていたが、私にはそんな言葉や空気が何よりも尊いもの感じられる落ち着いた環境であった。」(昭和37年10月7日朝日新聞夕刊)

こうした旅先でのささやかな出会いの中にこそ、向井潤吉がキャンパスを広げ、絵筆を構えるきっかけが潜み、彼が常に現場で制作に励んだ理由があったでしょう。

本展では、向井潤吉が当時その土地で直に感じたことを綴った旅行日誌や、当時使用していた地図などを展示し、向井潤吉の旅の足跡を辿り、そこに生まれた作品の数々をご紹介いたします。